

世界英語と新英語

—変わりゆく英語—

前野 澄子

WORLD ENGLISH AND NEW ENGLISHES
—CHANGING ENGLISH—

MAENO Sumiko

The English language gained the status of a global language in the mid 20th century. As English has come to be used in various parts of the world, many modified Englishes have been born. These Englishes strongly reflect the culture of the local people. These varied Englishes, called New Englishes, are recognized as part of the English language family and are being studied by many scholars. English is changing rapidly. What is in store for the future of the English language and what influence will it have in Japan? This paper will provide a brief overview on these issues.

キーワード：

First Language (L1) 第一言語 (母語)

Foreign Language (FL) 外国語

Future of English 英語の未来

Second Language (L2) 第二言語

New Englishes 新英語

World English 世界英語

1. はじめに

近年の英語の多様化、グローバル化に伴い英語研究における比較的新しい一分野が注目を集め始めている。“World English” (世界英語) および、“New Englishes” (新英語) という分野である。English が Englishes と複数形になっていることが奇異な感じを与えるが、これが本分野が研究対象となる所以である。

本稿では、ここ数年間に出版された本分野に関する主要文献を中心に、世界における英語の状況について概観し、それらが日本に与え得るインパクトについて考えてみたい。

なお、本稿で言及される “New Englishes” (「新英語」) とは世界各地で発達した種々の varied Englishes (「変種英語」) のことであり、「新英語」と「変種英語」はその意味で同義であるということ、また、“World English” (「世界英語」) とは、将来、世界規模で統一モデルとして誕生するかもしれない、イギリス英語でもアメリカ英語でも、その他の地域で使用されている英語でもない、真に世界共通語としての、新しいモデルの英語を意味するものであることを明記する。

2. イギリスによる英語の現状調査

イギリスは、チャールズ皇太子後援の下に「英語2000プロジェクト」を推進、本プロジェクトを実施したブリティッシュ・カウンシルは1999年「英語の未来」(“The Future of English?”, David Graddol) を出版して調査結果を発表した。

プロジェクト実施の目的について、同書は「英語の世界的な使用状況について予測し、英語の新しい教授法と学習法の開発を手助けすることにある」としている。

3. 世界の英語人口

同書によれば、英語の使い手には3つのタイプがある。第一は英語を第一言語 (first language) (L1) とする人々、一般的には母語話者がこれに相当し、第二は英語を第二言語 (second language) (L2) とする人々、即ち、第一言語を持つが、日常生活上必要に応じて英語を使う人々 (例えば英語圏への非英語圏からの移民) であり、第三は日常生活には必要としないが「外国語」 (foreign language) (FL) として英語を学ぶ人々 (日本がこれに相当する) である。同書は、近年、この第三のグループの数が急増していると述べている。

では、英語を使う人々は世界人口の中でどの位の数を占めているのであろうか。本分野における第一人者であり、“The Cambridge Encyclopedia of the English Language” (1995) の著者であるイギリスのデイヴィッド・クリスタル (David Crystal) 名誉教授は、英語を第一言語としている人々の数は、約3億7700万人、また、第二言語としている人々の数は約2億6000万人、さらに英語を公用語とする国の人口は14億を超えたとし、総合すると世界人口の約5人に1人が多かれ少なかれ英語を使用していると推定する。

また、青山学院大学の本名信行教授編纂による「アジア英語辞典」(三省堂、2002) によれば「英語の話し手は20億人にもおよぶ。このうち英語を『母語』とする人々は3億人、『公用語』とする人々は10億人、さらに、『国際語』とする人々は7億人にもなる。世界の人口が60億人として、3人に

1人が程度の差こそあれ、英語を使っている勘定になる」(p.3) と、さらに多くの英語人口が示唆されている。以上を総合すると世界全人口の20%から30%程度が何らかの英語能力を所持していることは確実と考えられよう。

4. 世界語の条件

英語を母語とする国はイギリス、アメリカ合衆国、カナダ、アイルランド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、カリブ海の国々などで、計約3億人以上が英語を母語として見られるが、母語話者の数においては中国語の約13億人にかなわない。

しかしながら、クリスタル (1997) は母語話者の数がいかに多くても一言語を世界 (共通) 語 (global language) とすることはできないとし、一言語が世界語の地位を得るには、世界の他の国々において以下の二つの役割を持たねばならないとする。

(1) 第二言語としての役割

第一の役割はその言語が一国において公用語であり、政治、法律、メディア、また教育の領域においてコミュニケーションの媒体となること、いわば社会において第一言語を補完する第二言語 (L2) として使用されていることである。英語は現在ガーナ、ナイジェリア、シンガポールなど70カ国以上の公用語であり、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語などを公用語としている国々の数を優に超えている。母語話者数においては遥かに英語を凌ぐ中国語も、この点においては英語に及ばない。

(2) 第一位の外国語

第二はその言語が公用語ではないにしても一国の外国語教育において第一位の外国語であることである。現在、英語は中国、ロシア、ドイツ、スペイン、そして日本、韓国など世界100カ国以上の国々で第一位の外国語となっている。この点においても、目下英語は他のいかなる言語も抑えて首位の座にある。

英語はクリスタル (1997) が世界語に求める以上二つの役割を満たし、世界語とみなされてよい

と考えられる。

5. 一言語を世界語とする要因

母語話者の数においては中国語より遥かに数少ない英語が、なぜ世界で公用語あるいは準公用語として最も使用され、また第一位の外国語として学ばれているのだろうか。クリスタル(1997)は次のように論じる。

(1) 権力(パワー)

第一の要因は「誰がその言語を話すか」にある。過去の歴史からラテン語を例にとろう。ローマ帝国の隆盛期、ラテン語は国際語として君臨した。ラテン語話者の数が他を圧倒していたからではなく、ラテン語話者が彼らが支配下においた奴隷たちより権力を持っていたからである。さらに、帝国滅亡後も千年の間、ラテン語が教育の場において国際語であり続けたのは、ローマカトリック教の持つ宗教の力(パワー)のおかげであった。現在、ラテン語は死語といわれ、学習者の数は極めて少ない。軍事・経済力において、また宗教力においてもラテン語よりパワーを持つ言語が台頭し、ラテン語を圧したからである。

ラテン語の例が端的に示すように、一言語が世界語になるには、文化的にせよ、政治的にせよ、軍事的にせよ、また、経済的にせよ、話者が権力者であることが必須要件である。

(2) 言語の特性

では、言語習得の難易度はどうであろうか。英語を例に取ろう。英語が世界語になったのは、英語が他の言語に比して文法が簡単だから、あるいは他のヨーロッパ言語に比して語尾変化が少なく、語彙の男性、女性、中性の区別を覚える必要がないから、といった議論が良く聞かれる。しかし、複雑な語彙の性別や語尾変化を持つラテン語が、かつて、国際語として世界に君臨したことを考えれば、言語の難易度が世界語の必須要件とはならないことは明らかである。

ある言語が世界語の地位を得るのは、その言語の持つ、構造上の特性、偉大な文化的遺産、宗教的意義などではなく、さらにこれらは一言語の存在を保証するものでもない。ある言語が世界語の

地位を得るのは、唯一、その言語の話者が持つ、権力、パワーであると、クリスタルは結論する。

6. 英語が世界語になった理由

過去の歴史においてローマ帝国がもたらしたラテン語、さらにギリシャ語、アラビア語、スペイン語、ポルトガル語などの言語も、同様に、彼らの持つ軍事力、政治力、経済力が、かつて彼らの言語を国際語として通用させた。

英語はどうであろうか。英語は現状において、軍事力、政治力、経済力のいずれにも圧倒的なパワーを世界で示し、世界語の地位を得た感があるが、英語の持つパワーはどのようにして生み出されたのであろうか。

言語学者たちは以下の二要因を挙げる。

(1) イギリスの植民地政策

英語の普及には、イギリスの19世紀における植民地政策にあずかるところが大きい。イギリスは植民地政策を通じて世界有数の産業・通商国となり、アフリカ、インド、東南アジア等世界の広範囲の地域に英語をもたらし、経済的、政治的支配力をもって英語を世界語とする素地を作った。

(2) アメリカのパワー

第二の大きな要因は20世紀に入ってからアメリカ合衆国の政治的、経済的発展と隆盛である。英語を第一言語とするアメリカは20世紀に入り西側諸国で最大の人口を擁し、かつ最大の経済力、軍事力を有することとなった。さらにラジオ、テレビ、電報、電話、などの先端通信技術をもたらし、20世紀後半に至っては全世界を変える技術革新と言われるIT革命をもって、英語が世界共通語とみなされるに至る最大の要因を作った。

7. New Englishes (「新英語」)の出現

他言語には類のないほど世界中に普及し、世界共通語とみなされるようになった英語だが、これだけ広範囲かつ多数の国々で数多くの人々によって使用されれば、各地域の言語や社会的特性を反映した変種の英語が誕生するのは必然とも言える。変種英語(varied Englishes)は、「新英語」(New Englishes)と呼ばれ、アジア、アフリカ、西イ

ンド諸島などイギリスの旧植民地国に主に見られるが、これら変種英語は近年ますますその存在感を増している。「新英語」は地域の民族性、言語を色濃く反映させながら、独自の英語の語彙、文法、書法を発展させている。その存在には賛否両論あるものの、最新の言語学は概ね英語の「変種」として認めようとしている。その論拠は、英語圏内にある多種の方言同様、基底構造 (underlying structure) は英語固有の構造を示すから、と言うものである。

変種英語の代表例には、アジアでは、インドで話されている「インド英語」、フィリピンで話されている「フィリピン英語」、シンガポールの「シンガポール英語」などがあり、これらの New Englishes (「新英語」) は、標準英語を規範にしなが、独自の語彙、語法を盛り込んだ一定の法則、システムを持っている。

ここで注目すべきは、New Englishes を発展させた国々においては、英語は現在も公用語あるいは準公用語として使用され、日常の生活と深くかかわっているということであり、New Englishes の誕生は、それを話す民族のエネルギーと社会的ダイナミズムの表れと考えられることである。

以下、アジアの New Englishes のいくつかと、その特徴を挙げてみる。例文および語用例は「アジア英語辞典」(本名信行編、2002) に拠った。

(1) インド英語

過去イギリスの植民地であり、イギリスと深い歴史的関係を持つインドは、英語を準公用語としている。インド英語は丁寧で格調が高いと言われている。

インド英語が丁寧であることの一例として以下の例文を挙げる。

◎ May I know your good name, please?

(お名前をおうかがいしたいのですが。)

(標準的英語では May I have (または ask) your name, please? など。)

その他、「アジア英語辞典」は、インド英語の独特な語用として、too (あまりに～) を very (非常に～) の代わりに使う、witness (「目撃する」「証拠として見る」の意) を、watch (「注意

して見る」「じっと見る」の意) の代わりに使うといった例を挙げている。

(2) シンガポール英語

シンガポール英語は独特の語法を発達させている。「アジア英語辞典」は次のような例を挙げる。

◎ can/cannot を独立させて使う。

“Can we come together?” “Can.”

(標準英語では “Yes, you can.” など)

◎ 名詞、形容詞、動詞を反復させて使い、副詞的意味を加える。

“My friend from China, she likes (to) shop-shop.” (中国から来た友人はとても買い物が好きだ。)

◎ 語尾、文末に lah (la) をつける。同辞典はこれをシンガポール英語、通称Shinglish (シングリッシュ) の神髄として、次の例を挙げている。

“OK lah.” (オーケーです。)

“Wait here lah.” (ここで待ってて。)

“Easy lah.” (簡単だ。)

(3) フィリピン英語

フィリピン英語は、アメリカ英語を規範としつつフィリピンの現地の言葉であるタガログ語を混合させたのが特徴である。

◎ 接続詞 but の代わりにタガログ語の pero を使う。

◎ 副詞 then の代わりにタガログ語の tapos を使う。

また、標準英語とは異なる語用もある。

◎ 「バスを降りる」 get down (from) the bus (標準英語では get off the bus)

◎ 「電気をつける (消す)」 open (close) the light (標準英語では turn on (off) the light など。)

フィリピン国内でのフィリピン英語に対する支持には非常に強いものがあり、アメリカ英語を規範にしつつも、独自の言語としての独立性を主張する意見もある。

(4) その他

その他、最近ではヨーロッパのドイツ語、フランス語、スペイン語話者等が使う英語を指す「ユー

ロ英語」や、インターネット時代を反映した簡潔で合理性を重んじる「インターネット英語」などが現れ、変種英語の一種とみなされている。

8. 新英語（変種英語）はどのように受け入れられているか？

New Englishes（「新英語」）の誕生は民族のエネルギーと社会の持つダイナミズムの表れと見ることができ、新英語、即ち変種英語は非英語母語話者間のみならず、英語母語話者間でも国内の dialects（方言）として存在しているとも言える。

New Englishes の台頭と浸透は、もはや受け入れざるを得ないほどの広がりと力を備えてきているのは既に見てきたとおりであるが、これら New Englishes に対しては、イギリスやアメリカの中でも、避けられない必然として認め、言語学的にも「英語」として立証されるとする議論がある一方、Standard English（標準英語）（イギリスではロンドンを中心とした南部知識層の英語、アメリカでは中西部の英語とされる）が存亡の危機にさらされるのではないかと危惧する英語教育関係者も多い。これに関してクリスタル（1997）は、英語はもはや一国の所有物ではない、イギリス人にとっては不愉快なことであろうが、選択の余地はないと、次のように述べている。

“The loss of ownership is of course uncomfortable to those (中略) but they have no alternative.”
(p.130)

さらに、クリスタル（1997）は、今後10年以内に、英語第二言語話者の数は第一言語話者（母語話者）の数を超えるだろうと予測し、変種英語の出現がこれを示していると、次のようにも述べている。

“The spread of English around the world has already demonstrated this, in the emergence of new varieties of English in the different territories…”
(p.131)

一方、グラッドル（1999）は、『「新英語」(‘New Englishes’) と呼ばれる変種が生まれた地域は、南アジア、東南アジア、アフリカ、西インド諸島といった旧植民地国である。こうした地域におけ

る独自の英語の形態は、活力とダイナミズムをそなえてはいるものの、その基底には正式用法が志向する正しさのモデルがあることが多く、(以下略)」（山岸勝榮訳、p.34）と、新英語の存在は認めざるを得ないにしても、イギリス英語、あるいはアメリカ英語といった世界標準英語へのシフトを望んでいることが窺われる。

新英語を生んだ国々でも、英語教育者間での意見は賛否両論である。しかしながら英国のチャールズ皇太子の後援のもとに編纂された「英語の未来」（グラッドル、1999）が、さらに、「教育・学習・使用の対象とする英語をアメリカ英語にするか、イギリス英語にするか、あるいは第二言語としての変種に基づいた英語にするかを決めるのは、英語を母語としない人々ということになる。少なくとも、英語を第二言語とする国で使用される英語の教科書は、地域変種に大きく配慮したものになり、地域変種を用いた題材を取り入れることで、地域的特色を配した内容となるのではないだろうか。」(p. 155) と述べているのは注目される。

9. 英語の将来

英語の本家イギリス、また英語を第一言語とするアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの国々にとっても、英語の将来は極めて関心のあるところだろう。

これについては、メディア、出版、教育での英語はますますシェアを広げ、今後長年にわたり、おそらくは、今後100年にわたり世界言語としての英語の地位は変わらないだろうというのが多くの英語学者、英語教育者の意見である。

そうであるならば一層、英語はますますその使用範囲を広げ、必然的に変種を数多く生み出していくことであろう。

クリスタル（1997）は、最も考え得る将来のシナリオは、英語の使用がさらに二極化され、身内、つまり、自国内では地域変種英語が使用され、外、つまりフォーマルな場では標準英語が話される、というものであると見る。

その一方で、英語はますますイギリスあるいはアメリカなどの母語話者特有の表現を薄め、世界

的な普遍的価値に基づいた、均一のモデル、**World English**（世界英語）を形成していくであろうとする見方がある。その過程において、英語としての統一性を維持するのは世界中でほぼ同じように教育されている英語の文法と語彙であろうと、教育の重要性を指摘する声も大きい。

10. 世界英語 (World English)

New Englishes の台頭はもはや認めざるを得ない状況になった。しかし、地域性を排除した、世界で通用する、しかも時代の変化に即した、世界共通モデルとしての均一な英語は可能であろうか。可能とすればどのような英語になるのだろうか。**World English**（世界英語）を求め、その可能性を探ろうとする研究は、今、数多く行われている。言語が常に簡略化されていくものと考えれば、**World English** のモデルは標準英語の文法を意識しつつも、非母語話者には理解し難い部分は統合、整理され、英語文化に固有で非英語母語話者には分かりにくい表現は排除されて行くだろうことは想像に難くない。

11. 日本における英語の将来

この1、2年、日本の TOEFL（米国大学留学希望者に対する英語能力テスト）スコアがアジア諸国の中でも極めて低く、韓国、中国より下回ったことが日本の学校における英語教育への批判となったことは記憶に新しい。

文部科学省では、「使える英語」の教育を目指して、平成14年4月英語教育改革施策を打ち出し、中・高校での英語教育の大々的な改革案を発表した。主要項目を挙げると (1) 英語に重点を置いた教育を行い、一部授業を英語で行うスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールの指定 (2) 英語担当教員および高校生の海外留学支援 (3) 英語担当教員の海外、国内研修の推進 (4) 小学校における英会話学習の推進、などである。

これらの改革案は日本における将来の英語使用状況にどのような影響を与えるだろうか。

まず、考えられることは、日常的に英語に触れ

る機会と時間が増え、英語を実際の場面で使用する機会と時間がより大幅に増えるだろうということだ。さらに、今の幼児、小学校低学年児童が社会人となる20年、30年後、これらの英語教育改革はすっかり根付き、日本人同士が英語で話し合い、英語でビジネスをする場面がごく普通に見られるようになる可能性もある。英語は日常生活に一層深く浸透し、各種の英語能力検定試験の成績も格段に上がるに違いない。

今一つは、「日本英語」の誕生である。英語の浸透度が高まるにつれ、日本特有の文化を織り込んだ「日本英語」が自然発生的に誕生しても何ら不思議はない。クリスタル (1997) が言うように、日本においても「標準英語」と「日本英語」の両方が TPO に応じて使用される、そのようなダイナミズムに溢れた時代が来るのは、それほど遠い将来ではないのかもしれない。

12. おわりに

2002年9月、東京で第41回 JACET（大学英語教育学会）全国大会が開催された。2日目、米国の州立カリフォルニア大学サンタ・クルーズ校のジョフリー・K・プラム (Geoffrey K. Pullum) 教授が“**English Grammar for the 21st Century: Time for an Exorcism**”（「21世紀の英文法：悪魔祓いの時」）と題して基調講演を行った。講演の内容は、英語圏内外を問わず、英語教師に染みこんだ英文法解釈を「19世紀の遺物」と断じ、意識の変革を迫るものであった。

言葉は生きている。そして、その言語を使う人々、地域、時代、社会の特性を反映し、影響を受けながら、変貌を遂げていく。クリスタル (1997) は、英語はもはや英語母語話者だけのものではなくなったという。今、カタカナ英語の溢れる日本は、日本人独自の「日本英語」を生み出し発展させていくのだろうか。いつの日か、真の世界共通語としての“**World English**”（世界英語）は生まれるのだろうか。本題に関する今後の動向が注目される。

(了)

《参考・引用文献》

- Crystal, D. (1997) *English as a Global Language*, Cambridge University Press.
- Hymes, Dell ed. (1971) *Pidginization and Creolization of Languages*, Cambridge University Press
- Newmeyer, Frederick J. (1986) *Linguistic Theory in America, Second Edition*, Academic Press
- Newmeyer, Frederick J. (1983) *Grammatical Theory*, The University of Chicago Press
- Pullum, Geoffrey K. (2002) *English Grammar for the 21st Century: Time for an Exorcism*, Keynote Address at JACET 41st Annual Convention. (第41回大学英語教育学会全国大会)
- デイヴィッド・グラッドル/山岸勝榮訳「英語の未来」(研究社出版 1999)
- マーク・ピーターセン 「日本人の英語」(岩波新書 1988年)
- 鳥飼玖美子 「TOEFL・TOEIC と日本人の英語力」(講談社現代新書 2002年)
- 本名信行編「アジア英語辞典」(三省堂 2002年)
- 「英語『海外仕込み』、国が応援」『朝日新聞』2002年8月18日
- 「英語の先生英語力特訓」『朝日新聞』2002年7月12日
- 文部科学省「英語教育改革に関する懇談会：平成14年度スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」、<http://www.mext.go.jp>

要旨

19世紀におけるイギリスのアジア、アフリカへの植民地政策、さらに20世紀後半のアメリカ合衆国の世界における政治・経済力の増大という二つの要因により、英語は世界共通語の地位を得たかに見える。

英語は世界各地で使用され、それは必然的に地域の言語、社会文化の特性を色濃く反映した数多くの変種英語を生み出すこととなった。

変種英語は言語学的にも英語の方言として認め

られ、世界中でこの分野の研究が盛んに行われている。

今、英語は英語圏内外で大きな変容の時にある。英語の未来はいかなるものか、それが日本に及ぼす影響はいかなるものか。本稿では最近の文献を中心に本問題を概観する。

(2002. 10. 31. 受稿)